

異世界に飛ばされた

Where is Ossan going in
another world?

おっさんは
何処へ行く？

12



シ・ガレット
ci garette

目次



第①章

守るための選択

.....

007

第②章

護るための選択

.....

155



ブロック

タクマの経営する
商会の相談役。
トーランの
元・商業ギルド長。

コラル

トーランの領主。
タクマの
尻拭いばかり
させられている。

タクマ

異世界に飛ばされて
きたおっさん。
趣味を楽しみながら
異世界を旅する。

ザイン

バミル王国の元宰相。
今はトーランに
派遣されている。

大口真神

タクマと縁の深い
日本の神様。
ヴァイスの実父。

キーラ

魔族の
リーダーの女の子。
小悪魔な性格。

タクマの仲間達



ヴァイス



ゲール



アフダル



ネーロ



ジュード



ブラン



レウコン



ナビ



アルテ



ヴェルド

主な登場人物

第①章

守るための選択



1 ダンジョン攻略後

異世界・ヴェルドミールに飛ばされてきたおっさん、タクマ。

彼は恋人である夕夏^{ゆうか}と結婚式を挙げたのだが、その最中に問題が起きる。タクマを見守る神・ヴェルド達が神力を使った祝福を行った結果、タクマ達の暮らすトーランの町が聖域と化してしまったのだ。更には参列者にも影響が現れ、タクマと親しい人々が若返るという現象が起きる。

若返りの方法があると世間に知られれば、争いの引き金となりかねない。また、タクマや家族達もトラブルに巻き込まれる可能性がある。

そうした混乱に際し、国王・パミルは若返りを隠蔽^{いんぺい}するために、ヴェルドとある計画を立てた。その計画とは、ヴェルドの力で若返りの秘薬を用意し、ダンジョンの報酬とする事だった。そして秘薬を飲んだ結果、若返ったと公表するのである。若返りの秘薬はダンジョンを最初に攻略した者だけが手に入れられる希少なものであり、全て使い切ったと説明すれば混乱が起きないと考えたのだ。

パミルがタクマにダンジョン攻略を依頼すると、タクマは王国軍の兵士・チコ、宮廷魔導士^{きゅうていまどうし}・ルーチェを立会人として、それに挑んだ。

そしてタクマは無事に攻略し、若返りの秘薬を手に入れたのだった。



タクマとヴァイス達守護獣^{しゅごじゅう}、チコとルーチェは、転移装置でダンジョンの外に出た。

そこにはチコの上司であるロハスと、彼の率いる軍の小隊がいた。

ダンジョンの周辺には、テントが張られている。ロハス達はもともと監視のためにダンジョンを囲むように野营地を作っていたが、ダンジョンのすぐ前に移動してきていた。タクマ達がダンジョンから出てきた時にすぐに分かるようにするためだ。

ロハスが、タクマの姿を見て走り寄ってくる。

「タクマ殿、ご無事でしたか！」

ロハスはタクマの後ろに立つチコに視線を向けた。

チコは前に進み出ると、ロハスに報告する。

「無事に帰還しました」

「では、あちらでダンジョン攻略の報告を聞かせてもらおう。タクマ殿、チコから報告を聞く必要があるので、王都に戻るのもう少しお待ちください」

ロハスとチコがテントの方へ移動していった。

しばらく時間がかかりそうだったので、タクマはアイテムボックスからテーブルや椅子を取り出し、近くの地面に設置した。

タクマはルーチェに声をかける。

「さて、俺達はどこでチコの用事が済むまで待とう」

しかし、ルーチェは緊張した様子で立ちつくしている。表情も不安げだ。

ルーチェは宮廷魔導士であるにもかかわらず、研究を優先して命令無視を繰り返していたため、クジにされかけていた。それで今回解雇を免れる最後のチャンスとして、タクマのダンジョン攻略の立会人を務めたのだが、途中で守護獣達の邪魔をするという失態を犯してしまっていた。

タクマはルーチェの様子を見て、王都に報告に戻るのが怖いだろうと予測する。

タクマはアイテムボックスからヤカンとカップ、インスタントコーヒーを出し、ルーチェに言う。「ルーチェ、とりあえずこっちでコーヒーでもどうだ？ 緊張するのも分かるが、今からそんな調子じゃ、疲れるぞ」

タクマは火を起こして焚火^{たきび}を始めた。焚火でお湯を沸かしてコーヒーを作り、テーブルの上に置く。

ルーチェはようやく椅子に座る。

「あ、ありがとうございます……」

カップを受け取ったルーチェの表情はとても硬い。タクマの予測通り、報告を終えたあとの処遇

が気になるのだろう。

タクマは人に気を遣うのがあまり得意ではない。なので、単刀直入にルーチェに尋ねる。

「自分がどうなるか不安か？」

ルーチェは黙っていたが、しばらくして口を開く。

「ええ……私は宮廷魔導士の義務を果たしていませんでしたし、そのせいで多くの人に迷惑をかけてしまいました。現実には認めているつもりですが、今後どうしたらいいか考えると怖いです……立会人も完璧に務めたとは言えませんし、報告を終えたら職を失う事になると思います」

ルーチェは続ける。

「王城から放逐^{ほうちく}されて、私は生きていけるんでしょうか。仕事も見つけられるか分かりません。もし仕事が見つからなかったら、一人で生きてく自信がないです。私の身の回りの事は今まで全て使用人がやってくれていましたから」

ルーチェは静かに涙を流していた。

タクマは彼女が言いたい事を全て言えるように、黙って話を聞いていた。

ルーチェが気持ちを吐露し終わったところで、タクマはゆっくりと口を開く。

「そうか……でも、全てを失う前に自分の悪かった所に気付けたのはよかったんじゃないか？ 大体まだクジになるとは決まってるだろ」

ルーチェは首を横に振る。

「私は王城の人達だけではなく、タクマ様にもご迷惑をかけていますから……ダンジョンでの失態については、包み隠さず報告書にまとめるつもりです」

タクマは言う。

「別にそこまでしなくてもいいんじゃないか？」

確かにタクマは、ダンジョンでルーチェの行動を強く注意した。だがルーチェは態度を改めたので、ダンジョンの攻略に問題は起こらなかった。だからルーチェに失態があったといっても、些細な事だと考えていたのだ。

タクマがルーチェにその事を伝えると、彼女は真剣な顔で述べる。

「私にできる事は、正直に報告書を記入するだけです。タクマ様の言葉は嬉しいですが、解雇の判断はパミル様にゆだねようと思います」

ルーチェの決意を感じたタクマは、これ以上の口出しはやめる事にした。

重い空気が漂う中、チコがタクマ達の所へ戻って来た。

「お待たせしました。隊長に報告を終えました」

「お疲れさん、意外と早かったな」

チコの後ろには、ロハスの姿があつた。彼はなぜか複雑な表情を浮かべている。よく見ると、チコもどこか神妙な面持ちだ。

タクマは不思議に思い、二人に尋ねる。

「どうしたんだ？ 何かまずい事でもあつたのか？」

タクマに聞かれて、チコは緊張した様子で言う。

「タクマ殿。実は、軍を辞めようと思うのです」

タクマはぎよつとした。

「突然どうしたんだ？ それに、辞めてどうするっていうんだ」

チコは真剣な面持ちで、タクマに告げる。

「私は、軍人として民を守る事に誇りを持っています。しかし、私の代わりになる人間はたくさんいると常々感じていました。そんな時、タクマ殿に出会ったのです」

チコはダンジョン攻略の途中で、タクマがこれから王都の防衛に手を貸すつもりだという話を聞いていた。そしてタクマと王国軍との橋渡しをする人間が必要になると感じたのだ。

タクマは一国の軍に相当するような力の持ち主だ。だから有事の際、王国を守るために動こうとしても、きつと軍との衝突が起こるだろう。

その時に軍の出身者である自分がタクマの側にいれば、やり取りが円滑になるはずだ。この役目は自分にしかできないと思っているとチコはタクマに伝え、更に続ける。

「タクマ殿は大きな力を持っている方です。しかし、個人でやれる事には限りがあります。だから私は軍を辞め、タクマ殿の補助をしていきたいのです。ダンジョンでタクマ殿の強大な力に触れ、

守りたいものは自分で守るという考えを聞いて、魅了されたからでもあります」

タクマはチコの急な申し出に戸惑ったが、特に断る理由もなかった。

それにチコは既に心に決めているようだ。意思を曲げるのは難しいだろう。

タクマはチコに改めて確認する。

「そうか。決意は固いんだな？」

チコは静かに頷いた。

「なら、俺の方は問題ないが……」

タクマはそう言って、ロハスに目を向ける。

「という事のようにだが、ロハス……隊は大丈夫か？」

ロハスは苦笑いを浮かべる。

「先ほど、チコから話は聞きました。隊は大丈夫……と言うと嘘になります。ですがチコの決めた事ですから、私は尊重したいと思います。彼はこれからタクマ殿に同行し、王城でパミル様に報告を行ったあとに軍を除隊する予定です」

言い終わったところで、ロハスはタクマに右手を差し出した。

「……彼を頼みます」

タクマはロハスの手をしっかりと握った。

ロハスと固い握手を交わしたあと、タクマはルーチェとチコに声をかける。

「それじゃあ、王都に帰るか。おっと、その前に、まずはコラル様にダンジョンを攻略した報告をしておこう」

タクマは椅子やテーブルをアイテムボックスにしまい、代わりに遠話のカードを取り出した。

そしてカードに魔力を流し、トーランの領主・コラルに連絡を取る。



一方その頃、タクマの家族達が暮らしている湖畔の家では、子供達が話をしていた。

「ねー、おとうさん達まだかなあ……」

「ヴァイスのおとうさん達が遊んでくれるけど、やっぱり寂しいね」

「早く帰ってこないかな？」

子供達の側には、彼らのお守りもをしている神達がいた。神達はタクマの留守中に危険がないよう、姿を変えて地上にやって来たのだ。

子供達の会話を聞いて、神達は心配そうに顔を見合わせた。

最初にヴェルドミールを司る神・ヴェルドが口を開く。

「やっぱり私達ではタクマさん達の代わりは無理みたいですね」

次に日本の神である大日真神おおひこのみかみが言う。

「うむ。この子達は、それほどタクマを信頼しているのだろう」

ヴェルドと大口真神は、タクマの存在が子供達にとって大切なものと、改めて感じていた。続けて日本の神である、鬼子母神きしもじんと伊耶那美命いざなみのみことも言う。

「皆タクマさんに会いたくて、待ちきれないようです」

「そうね……ダンジョン攻略はそろそろ終わるはずだから、早く帰って来るといいのだけれど……」

四柱の神々が元氣のない子供達を気にかけていたところ、家の中から夕夏が出てきた。

夕夏は子供達におやつの時間だと告げる。

子供達は返事をして、家へ入っていく。けれどその姿は、どこかしょんぼりしたものだった。

子供達が全員家の中に入ると、夕夏が四柱にも声をかける。

「皆さん、子供達の面倒をみていただいてありがとうございます。おやつの時間ですし、中でお茶でもいかがですか？」

大口真神はそれに返事をせず、代わりに夕夏に子供達の様子をどう思いかを尋ねた。

夕夏は、途端に顔を曇らせる。

実は夕夏も、子供達に元氣がないのが気になっていたのだ。タクマが不在になってから、子供達はずっと寂しそうな顔をしていた。

子供達は最近、タクマと一緒に過ごす事が多かった。だから久々に離れた事で、ストレスを感じ

ているのかもしれない。夕夏はそう考えていた。

大口真神は、俯いている夕夏に提案する。

「夕夏よ。子供達はタクマを恋しがっている。だったら待つているのではなく、子供達を連れて迎えに行くのはどうだ？ そろそろダンジョンから帰ってくるだろう」

夕夏はしばらく考えていたが、頷いて言う。

「そうですね……待つているだけじゃ氣が滅入めいりるばかりだと思っし、いいかもしれません。アークスに相談してみます」

夕夏の相談を受け、アークスは驚いた顔をする。

「迎えに行きたい？」

「ええ。あの子達はいいい子だから、このまま待つ事もできると思うわ。だけど、あの悲しそうな顔を見ちゃうと、何かしてあげたいなと思って……」

夕夏はそう言って、おやつを食べる子供達に目を向ける。

アークスも視線を子供達に向けたあと、深く頷く。

「確かに……悲しそうな様子ですな。これを放つてはおけません」

アークスはポケットから遠話のカードを取り出す。このカードは、コラルから渡されたものだ。「では、コラル様に相談してみましよう。コラル様はタクマ様との遠話のカードを持っています。」

タクマ様の動向を把握しているかもしれません」

アークスが遠話のカードに魔力を流すと、すぐに反応があった。

『アークスか。どうかしたのか？』

アークスが事情を話すと、コラルの豪快な笑い声が響く。

『はっはっは！ タクマの所にいるいい子達でも、父親がいないと元気がなくなるのか』

ちなみにコラル、国王パミル、二人の王妃、元宰相・ザインは、タクマの結婚式に参列した影響で若返っていた。しかし世間に若返りが知られれば騒ぎになってしまうため、今はタクマが異世界商店で購入した偽装のネックスで、若返る前の姿に変装している状態だ。

「子供達は最近、いつもタクマ様と一緒にいましたから……仕方ないかと」

『なら、子供達をトーランの私の屋敷に連れてきてはどうだ？ タクマ殿がダンジョンを攻略したなどのみち王都で合流する事になっているからな。私の屋敷で待機して、タクマ殿から連絡があったら、一緒に王都に行けばいい』

コラルは子供達の気持ちを尊重し、早くタクマに再会できるよう取りはからうと約束した。

コラルは更に、思いついたように言う。

「そうだ。せっかくだから子供達がより元気が出るように、サプライズにするのはどうだろう」

コラルが提案したのは、この話をタクマにも子供達にも内緒にしておく事だった。

お互いに知らされていないまま再会すれば、普通に会った時より嬉しいだろう、というのが理

由だ。

「ありがとうございます。では早速子供達に伝えます」

アークスはコラルに感謝して遠話を切った。

子供達の方を見ると、ちょうどおやつを食べ終わっている。

アークスはこれからする提案に子供達が喜ぶのを想像し、笑みを浮かべた。そして台所に保存しているワインを一本取り出して、子供達のもとへ向かう。

子供達の集まっているテーブルの前に来たところで、アークスは彼らの顔を見回して言う。

「ちゃんとごちそうさまはしましたか？」

子供達はそれぞれ「はい」と返事をした。

「では、おつかいをお願いします。夕夏様と一緒に、コラル様の屋敷へワインを届けてください」
アークスは手に持ったワインを子供達に見せてから、夕夏に渡した。

「お手伝いをこなして、タクマ様が帰ってきたら褒めていただきますよ。皆さん、できますね？」

子供達はお互いに顔を見合わせたあと、深く頷いた。

「では、よろしく願いますよ」

子供達は早速立ち上がると、早く行こうと夕夏を急かす。何もせずにタクマを待っているよりは、行動していた方が気がまぎれると思ったのだ。

夕夏はそんな子供達に優しく言う。

「待つて、待つて。そんなに慌てないの」

夕夏が見ると、アークスはいたずらっぽい表情を浮かべている。

（アークスがタクマに会えるって言わないのは、サプライズって事よね？　タクマに会ったら、この子達どんな顔するかしら）

夕夏は子供達の顔を想像しながら、嬉しそうに出発の準備を始めた。

それからふと目線を移し、タクマ達が引き取ったエルフの赤ちゃん・ユキの方を見る。彼女は大口真神と遊ぶのに集中していた。

機嫌がいいのに、遊びをやめさせて連れていくのもかわいそうだ。というわけで、ユキは後ほど大口真神に連れてきてもらう事になった。

一方その頃、トーランのコラル邸では、サプライズの準備が進められていた。

コラルは子供達に、庭で待機してもらおうと考えた。タクマがコラル邸に来る時は、庭に現れる事が多いからだ。

コラルは使用人に言いつけ、バーベキューの食材が入った籠かごを用意させる。

「コラル様、準備が整いました」

使用人の報告を受けて、コラルは満足そうに頷く。

「タクマ殿を迎えるには、簡単でもいいから、子供達を作った食事を出すのがいいだろう。会えな

くて寂しかったのは、タクマ殿も一緒だろうしな」

コラルはタクマ一家の喜ぶ顔を想像し、嬉しそうに子供達を待つのだった。

しばらくすると、コラル邸の門の外から元気な声が響く。

「「こんにちはー！」」

子供達が使用人に案内されて、コラルの待つ庭にやって来た。子供達は夕夏からワインを受け取ると、コラルに走り寄る。

「アークスさんにおつかいを頼まれてきたの！」

コラルは子供達からワインを受け取って、笑顔で言う。

「これはいいワインだ。ありがとう。そういえば、今日は庭でバーベキューをしようと思っ
ていてな。ぜひ皆で参加してくれ」

コラルは子供達に、食事の時間まで自由に過ごすように伝えた。

子供達はそれを聞くと、喜んでコラル邸の庭で遊び始める。彼らは湖畔でタクマを待つていた時より、かなり元気になった様子だ。

子供達がはしゃいでいるのを見ながら、夕夏はコラルに話しかける。

「タクマとの再会を内緒にしておこうというのは、コラル様の考えですね？」

「ああ。せっかく会うなら、驚きがあった方が喜びも大きいだろう？　私も子供達の笑顔を見たい

からな」

夕夏とコラルは、お互いに笑いながら頷く。すると、タイミングよくコラルの持つ遠話のカードが光る。

遠話してきた相手はタクマだった。

ダンジョンの前にいるタクマは、コラルに遠話で報告を行う。

「コラル様、問題なく攻略を終えました。今はダンジョンの外に移動しています」

『そうか……それで首尾はどうだったのだ？』

タクマはチコ達に聞かれていない事を確認してから、立会人がいても問題なかったと答えた。

『そうか……では、あとはトーランで詳しく話を聞かせてほしい』

タクマがダンジョンに向かった際、コラルは王城にいた。だからタクマは、てっきりコラルはまだ王都に滞在したままだと思っていた。

タクマは不思議に思っ、コラルに尋ねる。

「コラル様は今、王城にいないのですか？」

『うむ。王城では落ち着いて話せないと思っ、いったん戻ってきたのだ。君も慣れているトーランの方がよからう』

タクマはどこでも構わなかったのだが、コラルが気を利かせてくれたのだと思っ、それ以上は聞

かない事にした。

コラルはタクマに、更に指示する。

『ああ、その前に、立会人二人だけ先に王城に送ってもらえるか。パミル様から言われたのだが、君が王城に報告をしに行くのは、彼らが報告を終えてからになるそうだ』

「分かりました。では彼らを送ったあとに、トーランに向かいます」

『頼むぞ。それから、王都に向かう時は王城の中庭へ跳んでくれ。今の時間にパミル様の所へ跳んでしまうと、謁見の最中だからな。タクマ殿が向かう事は、遠話のカードで私から王城の使用人に連絡しておこう……それにしてもタイミングがばっちりだったな』

「タイミング？ それってどういう意味……あ、切れた」

コラルの最後の一言が気になったが、タクマは遠話のカードをしまい、立会人二人に声をかける。「二人を城へ送ったあと、俺はいったんトーランに戻る事になった。というわけでこれから二人はパミル様に報告する事になるが、準備はいいか？」

チコもルーチェも、問題ないと返した。

「じゃあ、早速行くぞ」

タクマはチコ、ルーチェ、守護獣達を範囲指定すると、一度行った場所を訪れる事のできる魔法・空間跳躍くうかんちょうやくを使用した。

タクマ達は王城の中庭に到着した。

タクマはヴァイス達に座っているように指示をして、待機する。しばらくすると、王城の中から数人の男が出てきた。

「お待たせしてしまい、申し訳ありません！」

出迎えてくれたのは、騎士四人と、文官らしき太った男だった。

「いや、コラル様に連絡をしてからすぐに来てしまったこっちも悪い。気にしないでくれ」
文官の男は頭を下げながら言う。

「そう言っていたけると助かります。本日はダンジョン攻略の立会人を送ってくださったと聞いていますが、このお二人でよろしいですか？ 宮廷魔導士のルーチェ様と、軍部のチョコ様ですね。本人だと分かるものはお持ちですか？」

チョコとルーチェは文官の男に促され、身分を証明するプレート差し出した。

文官はプレートを受け取りながら言う。

「はい、確認しました。ルーチェ様は、そのまま執務室へ移動してください。宰相のノートン様がお待ちです」

ルーチェは文官からプレートを受け取ると、タクマの前に来た。

「タクマ様、ここまでお世話になりました。今までご迷惑をおかけして申し訳ありません」
しおらしい様子のルーチェに、タクマは笑みを浮かべる。

「まあ、色々あったけど、あまり気にするな。危険な場所にいるから厳しい事を言わせてもらったが、こうして無事に戻れたしな」

タクマの言葉を聞いたルーチェは、少しだけ表情を和らげる。その顔はどこか晴れやかだった。

「では、タクマ様。私は報告がありますのでこれで……」

ルーチェはそう言って顔を引き締め、王城の中へ向かった。

文官は、今度はチョコに促す。

「チョコ様は王都に入るための手続きと、入城の手続きをお願いします」

「分かりました」

チョコは返事をする、騎士達がつけてきた冊子に自分の名前を記入する。

文官はチョコのサインを確認して告げる。

「では、所属している部署へ報告をお願いします」

チョコは文官の男から返却されたカードを受け取り、タクマのもとへやって来た。

「タクマ殿、王城まで送っていただきありがとうございました。これから軍の担当の所へ行き、辞めたいという話をしてきます」

タクマは、チョコに改めて確認する。

「……本当にいいのか？」

「ええ。問題ありません」

チコはとても穏やかな顔をしていた。自分の進むべき道を見つけたという充実感があつたのだ。その表情を見て、タクマはゆっくりと頷く。

チコも嬉しそうに頷くと、王城の中へ消えていった。

ルーチェとチコを見送ったところで、タクマは文官に尋ねる。

「……それじゃあ、俺は帰るけど、大丈夫か？」

「は、はい！ お帰りいただいて問題ありません。立会人のお二人から報告が終わり次第、パミル様からコラル様へ連絡します。それまでは自由に過ごされて問題ないとの事です」

タクマは文官にお礼を言っていると、ヴァイス達を呼び寄せる。

「じゃあいったん帰らせてもらうよ。皆、行くぞー」

そして、タクマと守護獣達の姿は、城の中庭から消えた。

コラル邸にやって来たタクマが辺りを見回していると、いくつもの小さな影が、声をあげながら突進してきた。

「おとーさーんーん！」

「帰ってきたー！」

「おかえりー！」

小さな影達は、タクマに向かって突っ込んでくる。

「うおっ、ちょ、ぐあ！」

タクマは飛びかかれ、芝生に押し倒された。

「あたた……一体何が……」

タクマはぶつかってきた影達に目を向けて、ようやくその正体に気付く。腰や胸にしがみついて嬉しそうにしているのは、子供達だった。

突然の再会に驚きつつも、タクマは笑みを浮かべる。

「皆、ただいま」

子供達も、満面の笑みで返事をする。

「「おかえりなさい！！！！」」

そう言ったあとも、子供達は嬉しそうにタクマにしがみついたままだ。

タクマがヴァイス達の方を見ると、彼らも同じような状況になっていた。子供達に抱きつかれ、口々に声をかけられている。

「ヴァイス達も、おかえりー」

「怪我不い？ 元氣？」

「ヴァイス達が怪我するわけじゃないじゃん」

「でも危ない所に行ったんでしょー？ 心配だったんだよー」

守護獣達もみくちやにされながらも、嬉しそうに子供達の顔を舐めている。



タクマは身体を起こしつつ、子供達に尋ねる。

「だけど、皆どうしてここにいるんだ？」

すると子供達は一齐に理由を喋り始めた。タクマには何を言っているのか聞き取れない。

タクマが苦笑いを浮かべて子供達を落ち着かせようとしていたところ、聞きなれた声が響く。

「皆、タクマが恋しかったのよ」

タクマが声のした方を見ると、そこには夕夏が優しい笑顔を浮かべて立っていた。そしてタクマに、子供達がコラル邸にいる理由を説明してくれた。

「なるほど。俺と子供達にサプライズをしてくれたんだな」

納得したタクマは、改めて子供達を見回す。自分達をこんなに思いやつてくれる家族がいると思うと、心から嬉しかった。

そこに、コラルの声がした。

「無事に戻ったようだな。まあ、心配はしていなかったが……」

タクマがコラルを見ると、コラルはとても楽しそうな表情をしていた。

タクマは子供達を引き連れたまま、コラルに報告する。

「戻りました。遠話でもお伝えしたように、ダンジョンでの目的も達成しました」

「うむ。まあ、そこら辺の話はあとで聞こう。今は子供達の相手をしてやるといい」

コラルはそう言って、屋敷の中へ戻っていった。

今度はコラル邸の使用人が、タクマに声をかける。

「タクマ様。食事の用意が整っています。皆様で召しあがってください」

使用人はタクマを庭に置いてあるテーブルに案内した。そこには子供達が作ったバーベキューがきれいに配膳されている。

「僕達もお手伝いしたんだよー！」

「お肉焼いたのー」

「私はお野菜切ったよー」

使用人は、子供達の言葉に頷いてみせる。

「皆さんがお手伝いをしてくださったので、私達は大助かりでしたよ」

タクマは子供達が準備したと聞き、驚いていた。そして子供達一人一人に感謝を伝えたあと、使用人にも言う。

「そこまで俺達に気を遣ってくれて、ありがとう」

「いえ、私達使用人も、子供達との触れ合いを楽しめました。それにしても、素晴らしい子供達ですな。皆素直ですし、料理が上手でした」

子供達がどんな風にお手伝いしたのかを使用人が語った。

子供達は得意げにタクマを見上げる。会えずに寂しい思いをした分、きちんとお手伝いできた事をたくさん褒めてほしかったのだ。

タクマは子供達の様子を見て、撫でてやりながら言う。

「皆、普段から家の手伝いを率先してやってくれるからな。慣れているんだよ、な？」

使用人はタクマ達家族の仲のいい姿を見て微笑む。

「なるほど……では、皆さん。久々の再会ですから、ゆっくりお食事をしてくださいね。私達は離れた所で控えているので、何かありましたらお呼びください」

使用人が下がっていったところで、タクマが子供達に声をかける。

「さて、せっかく皆で準備してくれたんだから食べようか」

タクマ達は席につくと、食事を始めようとする。

その時、突然タクマ達の目の前の空間が歪んだ。

タクマはとっさに声をあげる。

「皆、危ない！」

全員が息を呑んで、その場で固まった。

空間の歪みは徐々に広がり、人ひとり通れるくらいの穴ができた。

同時にナビゲーションシステムのナビが現れて、タクマに告げる。

「マスター、空間の歪みから魔力を感じました。ですが、危険なものではないようです」

タクマはナビに促され、魔力を調べてみる。その魔力は、タクマの知っている相手のもののようにだった。

タクマが皆に落ち着くように言うと、空間の歪みによる穴の中から、黒い影が出てきた。

それは大口真神に乗ったユキと、アークスだった。

タクマがほっとして警戒を解くと、大口真神が口を開く。

『タクマ、無事に戻ったようだな』

「ええ、無事に戻りました。しかし大口真神様、随分と機嫌がよさそうですね。いきなりこんな登場の仕方をするなんて」

タクマが呆れて言っても、大口真神は気にしない。

『うむ。子供達とお主の元気な顔が見たかったのだな。それから、お主の気配をこの地に感じたので、ユキを連れてきたのだ』

大口真神は、自分の背中に乗せたユキをタクマに見せる。

『この子だけタクマに会えんのはいかなからな。ちなみに、ここまで移動したスキルはユキのものだが、魔力は我がコントロールしているので彼女に悪影響はない』

ユキは大口真神の背中に乗ったまま、タクマに手を伸ばす。

「あーう！ だー！」

自分を忘れるなど言うようにアピールするユキを見て、タクマはにつこりと笑う。

「ユキ、ただいま」

タクマはそう言うと、ユキを抱き上げたのだった。

2 立会人からの報告

チコとルーチェは王城にいた。

パミルに謁見し、タクマ達のダンジョン攻略の報告を行っている。主な報告はルーチェが行い、

チコは足りない説明を補足する。

パミルと宰相・ノートンは、それを聞いて微妙な表情をしていた。タクマと守護獣達の力が想像していた以上のものだったからだ。

今回のダンジョンは難関であり、王国軍があたっても、攻略どころか調査すら難しかった場所だ。それをタクマ達は、危なげなく攻略したという。

パミルは驚きをにじませて言う。

「まさか、こんなにあっさりと攻略してしまうとは……」

ノートンは困ったように口にする。

「さすがと言わざるをえないですな……しかし、これほど強いと懸念を持つ者も出てきそうです」

タクマはパミル王国の守護者になり、王都の防衛に手を貸す事を宣言した。しかし、これほどまでに力を持っていたのは想定外だった。パミル王国が抱えきれぬのかという懸念を持たれる可能性

がある。

パミルがノートンに言う。

「ノートンの言う通り、自分達が制御できない力を持つ事に、恐怖を抱く者もいるだろうな……貴族の中にはタクマ殿の魔力による威圧を味わっている者もいるから、余計に恐怖心があるかもしれない」

しかし、パミルは貴族達を説得できると考えていた。タクマは昔に比べ、人柄が穏やかになっているからだ。

それにタクマのような力量の者が国のために動く時は、王国が存亡の危機にある時だと説明すればいい。普段から側に仕えるわけではないと分かれば、強い反発は起きないはずだ。

パミルはノートンに、そう考えを話した。

パミル達がひそひそと相談し合う光景を見て、ルーチェが問いかける。

「私達の報告で、王国でのタクマ様の立場が悪くなったりはしませんか？」

ルーチェは自分達の報告のせいで、タクマに影響が出るのではと心配になったのだ。

パミルがルーチェに答える。

「タクマ殿の人となりについて、私から貴族達に説明を行えば問題はないだろう。我々は一家で湖畔を訪れた事もあるので、説得力があるはずだ」

チコとルーチェはそれを聞き、ほっと胸を撫でおろした。

パミルはノートンに声をかける。

「貴族への説得などの対応は、立会人達の報告が済み次第行おう。手配を頼むぞ」

「はっ。この報告会が終わり次第、貴族を招集します」

「うむ。では、次はルーチェの処遇についてだ」

パミルはそう言うと、ルーチェのダンジョンでのタクマに対しての言動に触れた。

二人が提出した報告書にはダンジョンでのルーチェの行動が正直に記してあった。ルーチェが自らの戒めとして包み隠さずに書いたのだ。

ノートンが報告書を片手にルーチェに問いかける。

「報告書にはタクマ殿の邪魔をしてしまったとあるが、間違いないか？」

「はい。そこに書いてある事が全てです」

ルーチェはまっすぐにノートンを見て返事をした。

ノートンは、ルーチェの態度に覚悟を感じた。

ノートンは続ける。

「君はこの報告によって職を失う可能性もある。その事は分かっているのか？」

「もちろんです。覚悟のうえで正直に書いています。私は研究者です。公式な文書に嘘を書く事はできません」

目を逸らさずに答えるルーチェに、ノートンは内心で感心していた。ダンジョンに行くまでの彼

女とは、大きく印象が変わっている。

「ほほう……分かった。これが終わったら私室で待機するように。次に、チコだったか？」

チコはノートンに話を振られ、姿勢を正す。

「軍部から報告が上がってきたが、これは本当かね？」

「はっ！ 先ほど軍を辞す手続きを行いました」

ノートンは困った顔をする。軍部からは彼がとても優秀な軍人であり、引き留めを頼みたいと言われていたのだった。

事務方でも引き留めをしたそうだが、頑として受け入れられる事はなかったという。

「君はとても優秀だと聞いている。そんな人材が抜けるのは国にとって痛手だ。何か不満があるのなら言ってくれないだろうか。私にできる範囲で解消できるように手を打つ」

チコは自分の評価が思いのほか高い事に驚いた。それだけでなく、宰相のノートン自らが問題に対処すると言ってくれている。

しかし、チコは恐縮しつつも、自分の意見を変えようとはしない。

「そこまで言っていたき、ありがとうございます。けれど、残念ですが軍に不満があるわけではないのです。私は自分のやりたい事を見つけました。だから軍を辞すのです」

ノートンはため息を吐きながら言う。

「そうなのか……参考までに聞いてもいいだろうか。君は軍を辞して何をするつもりなのだ？」

チコはタクマに話した事を、パミルやノートンに分かってもらえるように丁寧に話していった。



一方その頃、タクマは子供達と一緒に賑やかな食事を済ませたところだった。

そのままコラル邸の客間に移動し、ゆったりと過ごしている。

子供達はタクマに会えてはしゃぎすぎたせい、今はウトウトとまどろんでいる。

ちなみにヴァイス達は屋敷の中に入らず、広い庭で休んでいた。

タクマは子供達を見て呟く。

「さて……皆眠そうだし、早めに湖畔に送らないと……」

タクマが子供達を起こそうとすると、使用人が姿を見せて言う。

「タクマ様。コラル様から今日は皆様にここに泊まっていたくようにと仰せついております。」

子供達はゲスト用の寝室へ連れていきましよう」

コラルは最初から、子供達が疲れて寝てしまうだろうと予測していたのだ。

タクマも、気持ちよさそうにしている子供達を起こすのはしのびなかったので、お言葉に甘える事にした。

夕夏がタクマに声をかける。

「タクマはコラル様と話があるんでしょう？ 子供達は私と使用人さんで連れていくわ」

「……悪いな。じゃあ、お願いしようかな。すみませんが頼めますか？」

タクマは使用人達に頭を下げる。

「もちろんです。お任せください」

使用人達も快く引き受けてくれたので、タクマはそのまま執務室へ向かった。

執務室のドアをノックすると、中からコラルの声がする。

「入ってくれ」

タクマが中へ入ると、コラルは書類仕事をしていた。タクマにソファに座って待つように言うてくる。

しばらく待っていると、作業を終えたコラルが、タクマの向かいのソファに腰かける。

「待たせたな、タクマ殿。では、王都に向かう前に、まずは私にダンジョンの報告を聞かせてもらってもいいだろうか。まあ、王都から立会人の報告について連絡が来ているから、同じ内容かもしれないが……」

「分かりました。順を追って報告しますね」

タクマはなるべく詳しくダンジョンの様子を話していく。

ダンジョンはタクマより先にヴェルドミールにやって来た日本人転移者・瀬川雄太^{せがわゆうた}の作ったもの

だった。タクマがダンジョンを攻略した結果、タクマに所有権が移った。そのため、タクマが自由に難易度の変更を行えるようになったと伝える。

コラルは驚いたように言う。

「本当にあのダンジョンの難易度を変更できるのか？」

タクマが頷くと、コラルはますます驚いた。

タクマに攻略を頼んだダンジョンは、あまりに難易度が高く、軍の精鋭でも攻略できなかった。その難易度が自由に変えられるというのだ。

コラルはタクマに告げる。

「あのダンジョンの使い道は、国から君に一任されている。もし使い道があるのなら、君が決めて構わないそうだ」

「いえ、俺ではダンジョンを持て余してしまうと思います」

そう言ったあとで、タクマはある事を思いつく。

「……いや、待てよ。使えるかもしれない」

それはダンジョンの難易度を変更できるからこそその使い道だった。

コラルは気になって、タクマに尋ねる。

「どうした？ 何か思いついたのか？」

「実は、ダンジョンをうちの家族達の特訓に使えるかと思ひまして……」

コラルはタクマの言葉を聞き、呆れてため息を吐く。

「君は私設の軍隊でも作る気なのか？」

タクマはきよとした顔で答える。

「いえ、そんなつもりはありません。ただ、うちには元暗殺者達が暮らしています。彼らが持っている戦闘技能を腐らせるのはもったいないでしょう。彼らが手に入れた技は、苦勞のうえに得た財産ですから」

元暗殺者の者達が、万が一の時に戦闘技能を使えるよう訓練しておけば、タクマの家族を守る事ができるはずだ。

「それから、子供達の教育のために使えるのではないかと考えています」

子供達が将来どのような道を目指すとしても、危険な目に遭った時に対処できるよう、身体を鍛えて自分を守るようにしておいた方がいいというのがタクマの方針だった。難易度を落として訓練すれば、子供達の実力を早く高められるだろう。

コラルはタクマの話を聞いて、みだりに戦力を高めるような目的ではないと納得した。しかし彼は、そのうえでタクマに注意を促す。

「なるほどな……だが難易度の選定はしっかりしないといかんぞ。そこを間違えば、命の危険に繋がるからな」

「分かりました。俺もその辺は注意をするつもりです」

ダンジョンの話が一段落ついたところで、タクマは若返りの秘薬について説明を始める。

パミルの計画通り、タクマはダンジョンで若返りの秘薬を手に入れていた。ヴェルドが用意してくれたのは、本物の若返りの秘薬と、それを元にしたダミーの若返りの秘薬だ。

本来、本物の若返りの秘薬は計画には不要なのだが、ヴェルドはダンジョン攻略を終えたタクマへの慰勞のつもりで、本物も獲得できるようにしたのである。

タクマはコラルに、ダミーの若返りの秘薬を見せた。細長い瓶の中に、金色の液体が入っている。コラルはうっとりとしてダミーの秘薬に見とれた。

「なんと美しい薬なのだ……」

タクマがコホンと咳払いをする。コラルは慌てて言う。

「すまん……それでこの薬はどうやって使うのだ？」

「普通のポーションと同じで、そのまま服用するだけです。コラル様、ザイン様、王妃様二人、パミル様という順番で飲んでいただくかと思っています」

タクマがそう話したところ、コラルは表情を曇らせた。

「……タクマ殿、今になって気付いたのだが、この計画には問題があるかもしれない」

タクマが驚いていると、コラルが説明する。

「パミル様、王妃様のような王族や、我々のような貴族がいきなり献上された薬を飲む事は普通ありえない。騙されて毒を盛られてしまう可能性があるからな」

タクマはコラルの言葉を聞いて、合点がいった。

「俺も見落としていました。つまり、パミル様達にダミーの薬を飲んでもらい、謁見に集まった人々に若返りの原因は俺や神の力ではなく、薬の効果であると錯覚させるためには、毒見役が必要だという事ですね……」

「うむ。おそらくはどちらかでそういった者を用意する必要がある。先ほども言った通り、貴族がいきなり献上した薬を飲む事はない。なので、私やザイン殿のようなタクマ殿の知り合いの貴族では毒見役にならないのだ。貴族以外の者を新たに探す必要があるが、秘密を守ってくれる人間でなければならん」

タクマは思いついて提案する。

「アークスとか、既に若返っている俺の家族にダミーの薬を飲んでもらうというのはどうでしょう」

しかし、コラルは首を横に振る。

「謁見に来た貴族達を納得させるためには、彼らに信頼のある人物でなければ難しいだろう」

「……」

考え込むタクマの様子を見て、コラルも悩ましげに言う。

「人選が難しいな。どうしたらいいものだろうか……」

パミル、王妃達、コラル、ザインは既に若返っている姿を偽装で隠しているだけだ。だから服用

するのはダミーの薬で問題ない。

しかし、それとは別に毒見役を立てるとなると、彼らには薬の効果を証明するために、本物の若返りの秘薬を使う必要がある。つまり、若返った人間が更に増えてしまうのだ。人選によっては、余計なトラブルを招きかねない。

コラルとタクマは、二人して考え込む。

沈黙がしばらく続いたあと、扉がノックされた。

「入れ」

コラルが言うと、扉が開く。

そこにはアークスが、申し訳なさそうに立っていた。

「失礼します。タクマ様、少しよろしいでしょうか？」

タクマが視線を向けると、コラルが頷く。

「構わんよ。煮詰まっちゃっている事だし、休憩にしよう。アークスの様子だと大事な話のよう

だから、私は席をはずそう」

アークスは困った顔をする。

「申し訳ありません。そんなつもりではなかったのですが……」

「なあに、気にする事はない。私も少し小腹が減ったのでな。下で軽く食べているから、終わったら呼んでくれ」

コラルは笑って、心苦しそうな顔をするアークスの肩を叩く。そして、部屋を出ていった。アークスはタクマにも頭を下げる。

「お邪魔してしまったようで、恐れ入ります」

タクマは問題ないと、首を横に振る。

「コラル様もあ言ってくれているんだ。ありがたく部屋を使わせてもらおう。で、どうした？」

タクマはアークスに、ソファに座るよう促す。

アークスはソファに腰かけると、話し始める。

「実は、プロック様とエンガードご夫妻が、取り急ぎ相談したい事があるそうです」

プロックは、タクマの商会の相談役を務めている人物である。一方、バート・エンガードとリアス・エンガードの夫妻は元商人で、今は学校など、タクマの仕事を手伝ってくれていた。

プロック達が三人揃ってやって来た、それも直接会って話したいという事は、込み入った相談なのだろう。タクマはそう考えつつ言う。

「そうか……じゃあ、謁見が終わったらその足で……」

そこでタクマはふと、ある事を思いつく。

（そうだ、毒見役について、プロックに相談すればいいのか！ 彼なら口も堅いし、元商業ギルドの長だから信用もある！）

タクマは立ち上がると、アークスと共に、早速コラルの所へ向う事にした。

コラルは屋敷の一階で食事をしていた。

「どうしたのだ？ そんなに急いで」

「毒見役について、ちょっとアテが思い浮かびまして……」

タクマがそう言うと、コラルは注意した。

「そうか。タクマ殿が言うくらいだから、口の堅い者なのだろう。だが、その者にとっても重要な判断だろうから、無理強いはいかんぞ」

「もちろんです。しっかりと話をしてこようと思います」

「分かった。今から行くのだろうか？」

タクマがコラルに向かって頷くと、タクマに代わってアークスが言う。

「プロック様とエンガード様は、商業ギルドの会議室にいるそうです。私も一緒にします」

タクマはコラルに頭を下げる。

「では、コラル様。俺とアークスで交渉に行ってきます」

「ああ、慎重にな」

コラルに家族達を任せ、タクマはアークスと共に、空間跳躍でトールンへ移動した。

3 打診

タクマ達はすぐにブロック達の待つ商業ギルドへ向かう。

ギルドに到着すると、受付の女性が話しかけてきた。

「これは、タクマ様。ブロック様とエンガードご夫妻から伺っております。どうぞこちらへ」

ブロックは、タクマがいつ来てもいいように受付に話を通していた。

受付の女性が案内されて、タクマとアークスは会議室へ向かう。

受付の女性が、会議室のドアをノックする。

「ブロック様、タクマ様がお越しです」

すると、部屋の中からブロックの声が響く。

「おお、こんなに早く来てくれるとは。入ってくれ」

タクマとアークスは会議室へ入る。

そこには、ブロックとエンガード夫妻が和やかな雰囲気ですわに座っていた。

ブロックとエンガード夫妻も、事情を知っているタクマでなければ気付かない程度かもしれない

が、数年ほど若返っているように見えた。彼らも結婚式に参列していたため、若返りの影響が出た

のだ。

（ほんの少しだけ若返りの影響が出ているみたいだ。ならその理由を説明するのと一緒に、毒見役のお願いをしてみるか）

タクマがそんな事を考えていると、ナビが反応した。

（マスター、人柄からいっても、ブロックさん達に頼むのはいい選択だと思います。ですが、おそらくこの三人には、若返りたいという望みはないのではありませんか？ 皆さん、いい年の取り方をされていますから……）

タクマはナビの言葉に納得する。彼らはタクマの商会を運営するようになってから、本当にいきいきとしていた。

タクマとナビがそんな風に念話ねんわをしていると、ブロックが言う。

「タクマ商会長、よく来てくれたのう。まずは座って一服したらどうじゃ？」

タクマはブロックに促され、彼の隣に腰かける。

「それにしても、随分和やかな雰囲気だな。俺はてっきり、何かのトラブルで相談があるのかと思っただけ」

タクマはまず、彼らの用件を聞く事にした。

タクマに振られて、ブロックが口を開く。

「いやいや、トラブルではないぞ。相談というのはリュウイチ君の店についてじゃ」

リュウイチは日本人の転移者で、今は生産職をして暮らしている。

「リュウイチ君から、食事処琥珀の^{しやうぼく}一部を借り、彼の作ったアクセサリーを売りたいと言われたのじゃが……ちよつと提案があつてのう」

ブロックはそう言うと、タクマに尋ねる。

「商会長は、彼のアクセサリーを見た事があるかね？」

それからブロックとエンガード夫妻はリュウイチの技術を絶賛していった。

リュウイチの作品は食事処琥珀の片隅で売るにはもったいないほどの代物だそうだ。リュウイチが主に乗っているのはアクセサリーなのだが、その美しさはブロック達でも今まで見た事がないレベルだという。

ブロックは更に続ける。

「しかも、リュウイチ君のアクセサリーは、ただの装飾品ではない。魔道具なのじゃ」

リュウイチの作るアイテムには、色々な魔法が付与されている。タクマの家族達に魔法を使つてもらい、それを付与しているらしい。

「魔道具はシンプルで武骨なデザインというのが一般的じゃった。デザインがよくて機能的な魔道具は、これまでなかったのじゃ。しかし、リュウイチ君の作る魔道具は、機能を兼ね備えたうえで美しい。絶対に売れるはずじゃから、間借りせずに店舗を持った方がよいぞ」

ブロックは断言した。リュウイチのアイテムは冒険者向けから、一般向けまで多様らしい。

「というわけで、儼らはリュウイチ君に店を持たせたいと思つておる。作ったアイテムも、かなりたくさんになつてきたと聞いておるのでな。商会長にできるだけ早く許可がもらいたくて、アークス殿に伝言を頼んだのじゃ」

話を聞く限り、タクマも店を持つ事に異論はなかった。

タクマがすぐに許可を出すと、ブロックは喜んで言う。

「おお！ では、早速動くとするかの」

ブロックとエンガード夫妻は、顔を見合せて嬉しそうにした。

「そっちの要件は、以上でいいか？」

タクマが聞くと、三人は頷く。

「そうか……じゃあ、今度は俺から三人に相談があるんだ」

タクマは話を始めようとしたものの、どう説明していいものかと考え込んでしまう。

「んー……」

ブロック達三人は、タクマのただならない雰囲気に変えた。

ブロックが言う。

「商会長。なぜ言いつらそうにしているか分からんが、黙っていても話は進まん。我らはどんな事を話しても秘密は守るぞ」

タクマは少し気が楽になった。

そこで神々の祝福によって、結婚式にやって来たタクマの知り合いに若返りが起きていると説明した。

そして毒見役を誰にするかという問題についても、正直に話す。

ブロック達三人は、タクマの話を静かに聞いてくれた。

タクマが全て話し終わると、バートが口を開いた。

「最近身体の調子がよく、まるで数年若返ったようだと話していたのですが、そういう理由があったのですね……」

ブロック達三人は自分の見た目や体調の僅かな変化に気が付いていた。タクマの説明を聞いて、ようやく合点がいった様子だ。

ブロックがタクマを見据えて言う。

「で、商会長はパミル様達にダミーの薬を飲ませるために、儂らに毒見役として本物を飲んでほしいというのじゃな？」

タクマがすまなそうに頷くと、ブロックはあつさり了承する。

「なんじゃ。そんな事か。だったら儂は構わんよ」

エンガード夫妻も、同じように首を縦に振る。

三人が躊躇なく了承した事に、タクマは驚いた。

固まってしまったタクマを見て、ブロックは穏やかな笑みを浮かべる。

「どうしたのじゃ？ そんなに驚く事かの？」

「い、いや……まさかこんなに簡単に承諾してくれると思ってなくて。今は若返ったといつても数年だけど、薬を飲んだら数十歳は若返るんだ。さすがに多少なり悩むものなんじゃないのか？」

タクマの問いかけに、三人は声をあげて笑い出す。

「全く……商会長にも困ったものじゃ」

「ええ、その通りです」

「私達がタクマさんの申し出を受けたのには、ちゃんと理由があるわ」

きょんとしているタクマに、ブロックが言う。

「商会長は知らぬだろうが、こんな事があったのじゃ……」

ブロックはタクマの商会の相談役に就任した時、宿や食堂を運営するメンバーと顔合わせをした。その時、タクマの家族達からこんな言葉をかけられたのだ。

「ブロックさん、私達はこの商会を、家族のような組織だと思っています。商会長であるタクマさんが親、働く私達が子です。一緒にタクマさんのもとで働く者として、ブロックさんも家族だと思っています。だからブロックさんも同じように、家族の一員として、私達に力を貸してくださいと嬉しいですよ」

ブロックは笑みを浮かべる。

「あの言葉には感動したのう……共に働く者が家族だという考えは、儂にはなかった」